



近未来原発物語

少女カーキのお話し
2 3 Days of twonovel

ラナ

ドイスでは原発が廃止された。「透明の箱」制度が廃止されたからだ。透明の箱に入れた情報は全て見えなくなってしまうんだ。人間らしいロボットはマイナスの情報をこの「透明の箱」に入れて見えなくしている。（こんなことあっていいの？）カーキは困惑してしばらく声が出なくなった。

（わたし、知ってるの！原発の放射能を受けたロボットらしい人間の子どもたちが、5年の潜伏期間を経た後に、どうなるか！こんなの、見てもらえない。助け出してあげなきゃ！）こんなことを考えながら、カーキは保育園へ向かってスタスタ歩く。（。。。でも、どうやって？）

カーキは特殊な才能で調べものをしている。「ええと。。原発は、大地震地帯のカルファルとニホトとニューシーランカにいっぱい建ってるの！」これは人間らしいロボットの作戦さ。世界各国の原発を地震によって爆発させ彼らの唯一の食べ物である放射能を世界中の人間らしいロボットにばらまく為さ。

「ぼく、具合が悪いの。ねえ、ドクター、どれ位原発の放射能を受けたら健康の被害があるの？教えてくれたら気が晴れるよ。外で遊ぶの我慢して家で友達とオセロしたいんだ！」「。。。」人間らしいロボットのお医者さんはロボットらしい人間のこどもにけっきょく何も教えなかった。

唯一の人間らしい人間カーキは「虹色のトンネル」を歩いて旅している途中で見つけた。そこでは何でも自由に叫んだっていい。でも外に出るとやはり灰色の世界である。（これじゃキタチャンソンと同じじゃない！）規律からはずれた言葉をカーキが発しようとするとう人間らしいロボットに口を塞がれた。

「はやく、ぼくの住んでいた所に戻りたい！！」カーキは言う。「だめよ！もうあそこには行かないって約束したじゃない！」ロボットらしい人間の家は爆発した原発の1km以内にある。カーキは困った顔になる。「いったい何が彼にこう言わせるの？」

「生きる為には、売らなきゃいけないんだ。。。」ロボットらしい人間の農家の人は涙を浮かべカーキにこう言った。

原発爆発後半径100km以内に住んでいたロボットらしい人間は放射能の少ない所に左遷させられ、そこで農業を始める事になった。代わりに半径100km以内には人間らしいロボットが押し寄せ住む事になった。彼らは食べ物である放射能を独り占めするためにここへ来た。

「本当に原発は安全なのですか？」ロボットらしい人間が言った。「少々お待ちください。」人間らしいロボットはそう言い、全ての原発のストレステストが始まった。彼らは人工的に原発をゆらした。ワン、ツ、スリ、ボン！ワン、ツ<スリ、ボン！xxxx「全ての原発のストレステストが終了しました。」

「もうすぐで原発がこわれそうだな。」もう一人の人間らしいロボットが言う。「かなり老化してるからな。」「もうすぐで、わたちの食べ物の放射能がたらふく食べられそうだな。」「ヒヒヒ。」「イヒヒ」

人間らしいロボットがスピーカーで大声で叫ぶ。「ハイ！みなさん～。原発は・・・？」ロボットらしい人間は右から左からうつろな声を出す。「スウ」「●」「○」「×」「△」「よくできましたねー！カット！」

ユイイツの人間らしい人間カーキは地球のそこら中に想像力の種をまくため歩いて旅をする。
これっぽちの想像力も許されない原発の灰色の世界が少しでも明るくなるように。

「原発ってどうやって廃炉できるの？放ったらかしにしていまいには暴れ始めるってこともあるの？いったいどうすればいいの？」カーキは暗闇の中一人叫んだ。

爆発した原発の町で「放射洗脳トライアスロン」が人間らしいロボット主催で開催される。まずは放射能プールで水泳、つづいて放射能の黒く重く臭い雲を駆け抜ける自転車レース、マラソンと続く。「さあ、おおいに盛り上がってください～！ここはタァ●○×△原発の町で～す。」

カーキは大統領寝言を言っている。「原発はもうファッショナブルじゃないわ。まず不要な予算を風力発電作りに使うのわ。10年ごとに3段階にしてまず危ない構造と地震が怒りそうな所は廃炉していく。ちゃんとね。次の段階では全ての原発を廃炉していく感じにする。最後は最終点検の段階ね。」

人間らしいロボットはロボットらしい人間に丁寧に説明することにした。「私達は原発に反対です。」「まあまあ。丁寧に説明するから～。イヒヒ。イヒヒ。ほれ。(100億円)。。。」「・・・イヒヒ。イヒヒ。コレさえアレバ城でも買えるな。ヒヒヒ。原発は●△だな。ヒヒ」

カーキはまだ大統領寝言を言っている。「すべての原発は、推進してきた政府が保有することにし、処理してまいります。。みなさんご協力おねがいたします。。ムニャムニャ。。」カーキは幸せそうにねむっている。

ふくさまに原発がれきを集めるなら、ふくさまのひとたちを助けてあげなきゃ！

唯一の人間らしい人間カーキはターラ・ルーラの予言を聞いた。「私は原発を推×します。」
ロボットらしい人間は皆その言葉をそのまま受け取った。しかし。カーキだけは彼の心の声が聞
けた。（ただし政府が本当の情報を与え人々に本当の民主主義を可能にした時だけ。。。）

カーキは予言者ターラ・ルーラに言った。「予言者ターラ・ルーラさん、あなたの言ってる事はわかったわ。あなたはあくまで中立な立場だってこと。あなたのほほ笑みにもやられたわ。。問題は、、、あなたの中立な態度は人間らしいロボットにいいように使われるってこと」「。。」

唯一の人間らしい人間の少女カーキは独り言を言っている。「この食べ物もこの花達も放射能が入ってるのね。でも私聞いた事があるわ。何でも体にいいと思って食べると体にいいんですって。私もそうしようかな？それにしても体の骨に染み込んでいくこの原発の放射能の感覚！たまらなく。幸せ！」

カーキは立ち上がった。「まったく人間らしいロボットには参るわ！テーペペに参加して、しまいには原発のせいで病気になったロボットらしい人間に医療費を全額自己負担にさせようとしているのね！」「自分で原発を推進しておいて食べ物である放射能を得た後は、彼らに何の補償もあげないのね。」

「ベトナムの皆さん、あなた方ロボットらしい人間には原発は高くて、何のメリットもありますが、人間らしいロボットの政治家さん、あなたにはウマイ話ですよ。あなたの食べ物の放射能を特盛にしますよ～！」 「うふふ。うれしいねえ。いただきまあす！」

カーキは大きな大きな赤茶の岩の上に立った。家も人も何もかも遠くに小さく見える。夕焼けがきれいだ「アホんだらー！」カーキは大声で空に向かって叫んだ。